

乾シイタケづくりに王道なし？

一 はじめに

本県の乾シイタケ生産量は平成4年の933トンがピークで、平成19年には約4分の1の244トンまで減少しています。

ところで、本年4月下旬にテレビで、全国乾椎茸品評会農林水産大臣賞を受賞した大分県の生産者の生産現場が紹介されていました。その内容は、枝打ちなどでホダ場の日射量を適切に管理するとともに、収穫時期には毎日天気予報を見ながら、降雨前にはビニール等で被覆をし、降雨後には速やかに除去するなど、基本技術を忠実に実施して、高品質の乾しいたけを生産しているものでした。

本県においても、高齢化や労働力不足といった課題を抱えておりますが、基本技術はおろそかにはできません。今回は、その中でも容易で効果が上がる技術を紹介するとともに、混同されがちな用語の正確な意味を述べたいと思います。

二 ホダ場での管理技術

(一) 天地返しとホダ回し

きのこは主に降雨が当たるホダ木の表面から発生していますので、天地返しやホダ回しを行い、発生していない裏面を表に入れ替えて次期発生に備えます。

天地返しが困難な時には、ホダ木を半回転させるホダ回しの作業を、梅雨期からきのこの芽づくり（原基形成）前の8月中旬頃までに行ってください。発生量が増加しやすくなります。

(二) ナタ目等の切込み等

シイタケ菌はまん延していても殆ど発生しないホダ木があります。この主な原因は外樹皮が1ミリ以上と厚く、光が内部に届きにくくなっているためです。原基形成促進には光が必要です。天地返しの時期に、ホダ木にナタで切れ込みを入れるか、スパイクのような道具で樹皮に穴を



樹皮に穴をあける道具

あけてください。

秋または翌春から発生し始めます。



樹皮の切込みから発生

(三) 天気予報と被覆資材

採取目的の大きさに近くなったきのこが雨に当たると色沢など品質が低下し、乾燥にも通常3割以上時間を多く要します。採取直前に降雨が予想される場合には、少し早くても採取するか、ビニール被覆等で雨を避け品質の良いものを生産しましょう。乾燥時間が短く燃料代も節約できます。

三 栽培関連用語

混同しやすい用語の一例は表のとおりです。

中には「ホダ木」のようにホダ木を育成中の場合と、きのこが発生する状態になったものの両方の意味で使われている場合もありますが、概ね表のとおり使い分けられています。

用語とその意味

用語	意味
原木	種菌を接種し、シイタケ栽培に使用する木
ホダ木	シイタケ菌がまん延してきのこが発生する状態となった木(育成中を含むこともある)
伏せこみ場	ホダ木を作るためシイタケ菌をまん延させる場所(やや乾き気味のアカマツ林など)
ホダ場	ホダ木からきのこを発生させる場所(やや湿気の多いスギ林など)
魔ホダ	きのこ発生の役目を終えたホダ木

四 おわりに

本県は、寒冷地の特徴を生かし、主にどんこ系のシイタケを生産していますが、近年は春先の乾燥や寒暖の差が激しいなど天候不順のため、品柄や生産量に大きな影響が出ています。

しかしながら、栽培の基本として、時期を逃さずに作業を進めることで生産量を確保できると思います。

林業技術センターでは、岩手県内の乾シイタケ生産拡大や新規参入者のための「乾シイタケ栽培の手引」を作成中です。今後是非活用していただきたいと思います。

林業技術センター

研究部 小原孝文